あのとき。これから。医療大。 02

Health Sciences University of Hokkaido

あのときの"ちょっといい話"、今まさに進んでいる"新しい取り組み"。
北海道医療大学が、これから未来へ向かう姿を探るために、
本学の歩みを"知る人"、"つくる人"に、お話をうかがっていきます。

齊田 健一さん
（歯学部1期生）

1986年、広島県尾道市にさいだ歯科医院を開業し、30年以上にわたって臨床活動に従事。同時に、尾道市歯科医師会会長（2011～2015年）を務めるなど、地域の歯科医療の発展にも尽力している。歯学部同窓会副会長、学校法人東日本学園後援会中・四国支部長。

医療大生にめざしてほしいのは、地域医療のリーダーです。

退路を断ち、北海道へ。

歯科医師をめざし、東日本学園大学（現・北海道医療大学）に入学したとき、私はすでに31歳。しかも、妻と2人の子どもがいました。13歳年下の同級生につけてもらったニックネームは「日本兵」。そんな、ちょっと変わった歯学部1期生の話です。

もともと私は、1971年に広島大学の大学院修士課程を修了後、日立製作所・日立研究所で研究職として勤務していました。ところが、寝る間も惜しんで働く会社人間は、入社7年目に体調を崩してダウン。「このままでいいのか」と自分の人生に疑問が生じました。そして、思いついたのは「医療がよさそうだ」。さっそく知り合いの歯科医師に相談したところ、東日本学園大学が歯学部を開設すると教えてくれたのです。それまでは、じっくり準備して次年度に受験しようとも考えていましたが、30歳の私にそんな猶予はないという結論に。最短で歯科医師をめざすために、東日本学園大学の受験を決めました。会社には退職願を出し、2週間残っていた有給休暇を使って猛勉強。何とか合格しました。

しかし、私の両親は、歯科大学に行くことを認めてくれませんでした。学費や生活費は妻の親族が援助してくれたのです。留年など、絶対にできません。建てたばかりのマイホームも売り払いました。妻と子どもたちに、それ以上迷惑をかけられません。まさに退路を断って、北海道へ。とにかく勉強に励み、支えてくれた家族や親族に、一日でも早く恩を返したいという強い思いがありました。

歯学部1期生の国家試験合格率100%に大きく貢献した、国家試験対策委員会の中心メンバー。一番右上が齊田さん。活動拠点の教室は、メンバーが大学職員と折衝し確保。職員は活動を支援するためにコピー機も設置した。

みんな一緒に、合格したい。

1978年、二度目の学生生活がスタート。年下の同級生は親しく接してくれ、妻と2人の子どもは贅沢のひとつもいわず、北海道の暮らしを楽しんでくれました。だからこそ、いい思い出ばかりです。そのひとつが、漕艇部の創部に携わったこと。1期生は、何をするにも自分たちで行動しなければならず、まずは仲間と協力して部員を集めました。しかし、漕艇部と名乗りつつ肝心のボートがありません。ですから、部員が小遣いを持ち寄って、世界で一隻のボートを造船所につくってもらいました。創部を通して深まった絆は、かけがえのない財産です。

もうひとつの思い出は、国家試験対策委員会を立ち上げたこと。5年生になると、試験のことが気がかりでなりませんでした。自分はもちろん、苦楽をともにした仲間も、全員で合格したかったのです。そこで、成績優秀者に声をかけ、勉強会を開いたり、他大学から情報を入手したりできる体制をつくりました。私自身も同級生にノートを貸し、わからないところがあれば教えました。また、我が家に集まって勉強することも。そんなときは妻がみんなにカレーをつくってくれました。一時は勉強会の出席率が低くなったりもしましたが、最終的には一丸となって国家試験に臨み、受験者の全員合格を達成。学生主体の活動は現在も受け継がれており、少しは母校への恩返しになっているのかもしれません。

1期生は現在、全国各地で歯科医療をリードする存在になっています。「齊田さんにお世話になったから」と尾道を訪ねてくれる仲間がいることはうれしいですし、何より同期の活躍がとても誇らしいです。

卒業してからが、本当のスタート。

私の場合、卒業後の目標は明確でした。40歳までに、故郷で自分の歯科医院を開業し、30年間は仕事を続けることです。自分に足りないことを学ぶために、2カ所の歯科医院勤務を経験。そして、39歳のとき、感謝の気持ちを返すという思いを込めて「返仁」と理念を掲げ、開業することができました。

しかし、しばらくは臨床に経営に、言い表せないほど大変な日々が続きました。従業員への要求はかなり厳しく、慕われる院長ではなかったと思います。そんな時期、私の様子を見かねてでしょうか、お世話になっていた歯科医師の先生が、とあるセミナーを紹介してくれました。従業員あっての自分と気づかされる内容で、「返仁」とかけ離れていたことを自覚。「上から目線を捨てよう」。そう思ってはじめたのが、トイレ掃除です。毎日、誰よりも早く出勤して掃除。習慣になる頃には、「さいだ歯科医院は今日も存在している」、「トイレを使ってくれる患者さんや従業員がいる」と、勉強に励んだ学生時代のような、素直な感謝の気持ちで満たされていました。

1979年10月、音別キャンパス構内の沼で行われた漕艇部の進水式。翌年4月、3年生となった1期生は当別キャンパスへ。そのため、ようやく完成した記念すべき第1号ボートはすぐに2期生へと受け継がれた。

2016年、院長職は次男に譲りました。開業30年という目標を達成したからです。奇しくも次男は、私の開業時と同じ39歳でした。ちなみに長男は、結婚相手の故郷・沖縄で歯科医院を開業。家族で北海道へ渡った40年前、3歳と1歳だった子どもは2人とも医療大を卒業し、歯科医師として頑張っています。一方私は、変わらず臨床現場に立っています。毎日のトイレ掃除は、楽しくて仕方ありません。

これから医療は、在宅、予防へシフトした地域包括ケアが主流になります。歯科が全身に与える影響も次々と明らかになり、歯科医師の活躍の場はさらに広がるでしょう。尾道市の介護・医療ネットワークで副委員長を拝命している私はそう実感していますし、少なくとも、歯科医院で患者さんを待つ時代は終わりました。求められているのは、さまざまな現場に足を運び、多職種と連携しながら地域社会に貢献すること。ですから、訪問診療の現場や福祉施設での口腔ケアを経験できる学生のみなさんは、とても恵まれています。大切なのは、卒業後どう羽ばたくか。国家資格の取得はゴールではなく、スタートであることを忘れないでください。そして、北海道医療大学は、医療人の未来を展望できる場所であり続けてほしいと願っています。